

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊十号

夏号
平成二十九年
七月九日
(不定期です)

法然上人のお言葉 (「一枚起請文」より)

只、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思いとりて申す他には別の子細そうらわず。ただし三心四修と申す事の候は、皆、決定して南無阿弥陀仏にて、往生するぞと思ううちに籠もり候なり。

1、心からまごころをもって、2、自身の罪業の有無を思わず、3、極楽に生まれようと願つて、なむあみだぶつと阿弥陀様の御名前を称えるのが、極楽往生が決定されるお念仏です。

(灌仏会に飾る天道花)



この、

- 1、心からまごころをもって、
- 2、自身の罪業の有無を思わず、
- 3、極楽に生まれようと願つて

お念仏を称える、この三つの心の要素をひとまとめにして表すと、

ただし三心四修と申すことのそうらうは、皆、決定(けつじよう)して「南無阿弥陀仏」にて往生するぞ、と思う内に籠もり候なり。(法然上人・「一枚起請文」)

くただし、三つの心とか四つのお念仏を称える時のやり方というのは、ひとことでは、すべて、南無阿弥陀仏と声を出して称える事によつてこれで決定して必ず極楽世界に生まれるぞ、と思う気持ちにまとまる事になります。

という事ですが、どうしても疑問が生まれると思います。

右の2と3は、分からないことはないと思います。

どんな罪人でも我が名を呼べば救うぞよ」と思し召す阿弥陀様のことや、その世界のことを受け入れられるか、そうでないかの違いだからです。

2から考えてみましょう。自身の罪業の有無を問題にしない」というのは、勿論悪いことをしたと思つたら、そのまま知らんぷりして「南無阿弥陀仏」でよいということではない、ということ、自ずとお解りになると思います。失敗したり、本当に悪いことをしてしまったら、反省して、二度としないように気をつけたり努力する、というのは当然です。仏様にお浄土まで引き立てられる身だからといって、社会でも当然なところがまえを無視することは、問題外です。わかっちゃいるけどやめられない」難しい徳目でも、出来る様に挑戦するのも大事です。わかっちゃいるけどやめられない」から、私はとても清らかなみ仏の世界に生まれさせて頂けるような者ではない」と、卑下する必要はありませんよ、という事です。

それでも、あまりにも自身の身がつたなかつたり、心が「おびえ症」だつたり、妄想がたくさん出てくるので、「このような我が身では、とても立派で神々しい阿弥陀様や極めて清らかなその世界に生まれる事は叶わないのではないか」と疑う気持ちもありえるのです。



実は、これには伝承があります。それをこれから申し上げます。

お念仏しているときの「疑い心」には二種類あります。

一、阿弥陀様のお念仏を称えれば、どのような人でも迎え取るという阿弥陀様のおこころ(本願)を疑う、

即ち仏様の方を疑うのと、

二、本願の道理は疑わないけれども、あまりにも我が身がつたないの、²「このような状態の人間が生まれるのだろうか」という、

救われる我が身の方を疑うのとの二種類です。

前者の仏様の方を疑うのは、もともとみ仏を疑い、本願の道理を疑っているの、往生出来ません。この人はお念仏をとなえることが、まず無い人です。

後者の「我が身のつたなさを疑っている人」。この人は、往生します。なぜなら、御仏のことは、うたがっていないからです。

法然上人のお言葉に「疑いながらも念仏すれば往生す」という言葉がありますが、これは、この後者の人の事をおっしゃっておられるのです。

しかし、このような状態の時は、「南無阿弥陀仏」の声とともに臨終の時に御仏の慈悲によって祐けを加えられて、清らかな世界に生まれることによって、その環境によって、このつたない我が身の内実が清らかにさせて頂けるのだから、往生させて頂けるのだ、と思つて、お念仏を称えながら、喜びの気持ちがあつても生まれるようにするべきだと思います。とにかく、明るくお念仏が出来ることにはありません。この明るくというのは、気持ちの内のことであつて、必ずしも外に表情として現れなくても良い事だと思います。

3については、阿弥陀様や極楽の世界を否定なさるならば、このような極楽往生の道理を聞くひつようもなく、他の種類の「入生のモットー」を抱いて元気に頑張つて下さい、ということになりますが、阿弥陀様や極楽の世界というのは、お釈迦様のように「悟つた人」即ち

「阿陀」になつた方の異口同音の教説なので、私達には、初めて聞い

て、わかるわけがありません。したがつて、「否定」する根拠も持っていないはずで、そのような教えは見聞きしていなかった」としかいえないはずで、見聞きしたことがなかつたから違ふと思ひます」というのは、変です。それがまかりとおつたら、学校の学生は、教科書に書いてあることをすべて否定しなければなりません。否定するなら、ちゃんと調べて、(理学系の法則だつたら、実験や計算を)やつてみてそれが間違つている事を自分の力で証明しなければなりません。

又、難しい教理上ならば、根拠はたくさんありますが、それらはむずかしくて分からないので否定します」というのもおかしいです。それから、称名念仏によつて、智見が開発されて、極楽世界や阿弥陀様をご体験なさつた(「三昧発得」といいます)徳の高い先人もたくさんいらっしゃるのですから、それらの尊い方々の言葉は信じないけれども、家族やお隣さんの言葉はしんじているのです、というのも妙に変です。

というわけで、仏様のお悟りの内容も、極楽世界のことも、教えを²聞いた私達は「仏様のように悟つて完璧に分らないから信じる」のであつて、この世界に(父母を縁として)生まれたことはわかりますから、この人生の次は、「樂のみを受ける極楽に生まれたいと願う」というのも、そうでなければ、人生終わったのちは、どうなるのかわからないことから想像すれば、気持ちの話ですから、極楽に生まれたいと願う事はそう難題ではありません。

わたしたちがわからなくなる問題は、1の、心からまごころをもつて」という事だと思います。

心からまごころをもつて」といつても、私はお念仏しているとき、まごころからお念仏の聲がでているだろうか、或いは「なむあみだぶつ」と申している時でも、「これでいいのでしょうか」と思ひながら、称えたことはありませんでしたか?このことは、だれにでも心に浮かぶであらうことです。

実は、このことにも、古来から、伝承があるのです。まず、昔から

だれでもこのような心理になる可能性はあるものだとして理解しましょう(筆者の私にもありました。)

その上で、伝承を申し上げますが、**お念仏をしているときの気持ち**が「まごころであるかどうか」というのは、**極楽に往生するためのお念仏だと理解して申しているか**、どうかであるだけです。

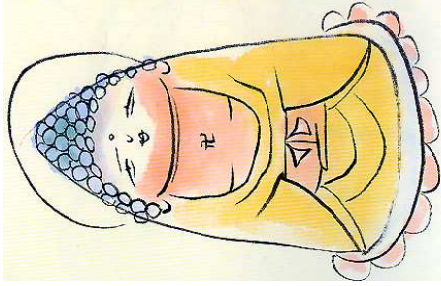
なむあみだぶつ」のお念仏が、極楽往生以外の〇〇が叶いますように」の祈禱の念仏だったら、それは「まごころのお念仏」ではありません。又、「この病気が治りますように」のお念仏だったり、「この心の悩みが無くなりますように」のお念仏だったり、あるいは、家の中がつつがないように」のお念仏だったり、とにかく「このお念仏は極楽世界に生まれて阿弥陀様や先亡の先祖の方々にお会いするための南無阿弥陀仏」でなければ、すべて、**虚仮いつわり**の念仏です。

又、仏様への感謝報恩の念仏も**虚仮いつわり**の念仏です。仏様は、「我が国に生まれさせよう」との本願なのですから、**極楽往生のためのお念仏だと思つて申す念仏**だけが、「まごころのお念仏」であり、**本願の念仏**と呼ばれ、**仏様の本願に乗るお念仏**なのです。

この世でかなえる願望を目的とした動機のお念仏でなければ、どんな心の状態でも、**極楽への歩みとしての正しいお念仏**、「まごころの」お念仏なのです。これが、伝承事です。

巻頭の法然上人の言葉は、このような意味だと受け取って下さい。

只、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思いとりて申す他には、別の子細そうらわず。ただし三心四修と申す事の候は、皆、決定して南無阿弥陀仏にて、往生するぞと思いうちに籠もり候なり。



(阿弥陀如来・定印仏)

法然上人 「一枚起請文」より

日本の習慣・日本人の心(新シリーズ)

2、日本は、世界でも稀に見る「君民共治」、「君民一体」の国

前回では、ご皇室の方々は、私達国民一人一人を、「夫御宝(おおみだから)」と呼び、本当にそのようにお考えになっています。初代神武天皇の時から、このことは変わりません。

京都御所(京都にある天皇家の居所)をご覧になったことがあるでしょうか? 明治時代までは、そこで(平安京の時代から)代々の天皇は、毎日、国民一人一人の幸福を神様に祈願なされて来ました。京都の御所に行くと分かりますが、広い敷地の周囲は、3m弱程の高さの塀に囲まれているだけです。

一国の元首の宮城(きゆうじょう)で、お堀も無く、一般家屋と同様な普通の高さの塀だけで囲まれているそれは、世界広しといえども、日本だけではないだろうか? と思います。

外国の人は、この光景を見ると、とても不思議に感じる人もいないでしょうか。二千七百年間、この雰囲気、中に侵入してわるさをしようとする人が一人も無く、国の秩序が保たれてきたのですから。戦国時代も、国そのものをひっくり返そう、とまで思う武将も、一人もいませんでした。

外国の歴史を見ると、皆、例外なく、王様の居宅は、厳重なお堀や、小高い塀や、崖などで守られている構造になっていて、一般民の町並みからは少し離れている所にあることが多いと思います。(日本でも、將軍や大名の「お城」がそうですね。)

その理由は、たいがいの王権が、武力による戦いによって成立してきたからです。前の国家、政權を、戦う事によって滅ぼして、新しい国、政權を成立して来たからです。力で捻じ伏せた者は、いつか、逆



に力で滅ぼされる事を恐れます。この理由で、大概の権力者の居住地は、暴力で攻められても大丈夫だと安心するために、厳しい要屋の様
な造りになっているのです。

武力によって成立した王様や皇帝という地位にある人は、大体、領
士とその国民を、「自身の所有物」と見たり、一人一人の人民の身心
両面の痛みをあまり考えないで権力を自由に振って、支配しようとする、
この統治の方法を取ってきたのが、大概の権力者の歴史です。(日本の江戸時代までのお殿様は、ここまで差別的で理不尽な地方統治を
していたとは思えません。この事は別の号で述べようと思います。)

ところが、日本の場合は全く異質な統治の方法を取って来たのです。
この、すぐれた統治方法を取ってきた日本だけ、推定二千五百年以上
も同じ国として続いている、世界で最も歴史の古い国となったわけ
です。

その統治の方法というのは、古代から言われている言葉を使えば、
すめらみこと(天皇)による、**じらす統治**と言われます。(す
めらみこと」や「じらす」という言葉は、「古事記」「日本書記」に出
ている言葉です。)

「じらす統治」とは、どの様な統治でしょうか?(この統治は、今現在
でもしつかりと成立している事です。)

「じらす」とは、「知らず、知らしめす」という意味で、代々の天皇
が、即位している時の日本の国、日本の国民の色々な事情の全てを、
すみずみまで、「お知りになっている」という事です。日本国内、国
民の事情をよく知っておられないと、天皇陛下のお仕事である、「国
民一人一人の幸福を神々の前に祈る」という事が出来ないからです。

あそこで災害がありました、こちらで、喜ばしい事がありました、
経済事情はこうなっている、従って、この様な事情が国民生活にある、
今年、この作物は、あの地域で、これだけ取れた、などなど、国内
事情をよくよくお知りになって、悪い事象は好転する事を、慶びの事
象はますます良くなるように、祈っておられるための基となる行為が、
「じらす」という言葉の意味です。

かかる地位にある方は、只、いらっしやるだけで、自然に日本の民
が、「(なんだかんだあつても)まとまってい、その状態を、「じらす
統治」というのです。

天皇陛下は、いらっしやるだけで、日本は自ずと、なんとはなしに
まとまっているのです。なんとも不思議にも思えますが。

だから、天皇という地位にある方は、具体的な政治の行為をする事
はありません。仮に強いご希望があつても、いくつかの手段で示唆し
たり(今の用語で言えば、余程の事があつた時に、「質問権」「激励権」
拒否権」を行使する事があるのではないかと、この分野の専門家
の先生方は仰います。)するだけだと思ひます。

天皇陛下は政治をつかさどる事はありません。しかし、いらっしや
るだけで国・国民がまとまる、この力は目に見える所ではどの様に作
用しているのでしょうか。

現代では、私達にも最も分かりやすい例として、政治をする官職の「任
命」をする事と、法律を公布する事、その他、種々の、国を代表した、
国事行為を行なう事などに表われていると思ひます。これらが出来ると
4
のは、天皇陛下に限るのです。何故かといへば、天皇という地位には、
それだけの「権威」があるからです。

例えば、いくら選挙によって国会議員に選ばれ、国会によって「総
理大臣」に指名されても、天皇によつて「認証」されなければ、「た
だの人」なのです。

(皇居で國務大臣や、衆参両院議長、最高裁判所長官の「三権の長並
びにそれに準ずる役職に就こうとする人々」は、陛下による「認証式」
に臨まなければなりません。)

又、国会で法律が成立しても、陛下による「公布(御名御璽のついた
公文書の成立)」が無ければ、私達国民が守るべきルールとしての「法
律」とはなりません。

政治(司法・立法・行政)をつかさどる人々の権原や、法律文を権威
あるものにする事が出来るのは、天皇陛下が私達国民の総意、代表と
なられて「権威」をそれら為政者の地位、法律の文章に与える事が出

来るからなのです。

国民一人残らずの幸福を祈る方である陛下の認証(權威)の付与を通して、私達国民が政治権力を持つ人を認証し、私達国民が一人残らず守るべき社会ルールである法律を自から認め守ります、という意志を表わしている、という事になるのですから、この陛下の權威による認証(官職や法律に与える權威付け)が、そのまま、私達国民による認証と權威付けになっている、ということだと思います。

だから、現行憲法典ですと、天皇の地位は、国民全体の代表である、「国民統合の象徴」であり、それは「国民の総意に基づいている」とことと、「国民主権」が成り立っていることについては、大きくはずれている事はないと思います。

だから、君民一体(天皇と国民全ては、一つの体のよう)であり、君民共治(天皇と国民が共に支えあつて国の秩序を保ち治めている)と言われるのです。君民一体とか、君民共治という言葉は、聞きなれない言葉ですが、昔から伝わっている言葉で、右記の様に、近現代の立憲君主の仕組みの中でも、間違いないで生きています。

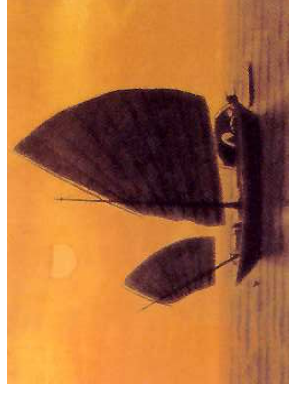
君(王様)が大きな政治権力を持ち、民(国民)を力で支配すると、民(国民)の人としての権利も無視されることがある、これが世界の歴史で、王制だった殆どの国の歴史です。

このような、民の方が納得せず、渋々王権に従う状態になる時もあると思われる統治法は、日本の神話では、これを「うしはく」統治、と呼んで、良くないものである、と古代から認められていて、本来に良い統治は、「じらす」統治である、というのです。

統治者は、民の事を自己にとつては「だからもの」のような人々と大事に思つて、常日頃の様子を知り、「その幸福に本物の祈りを捧げる、そして民の中から実際の政治を行う者が出てきて、それに政治を荷う資格(權威)」を与えて政治を委任する、政治を担う人は「權力」を持ちますが、「權威」を有する天皇に認証されなければ、「權力」をもった人にならないのです。

即ち、日本だけ、一国の「權威」と「權力」が分れているのです。

(南海夕日)



この、「權威」と「權力」が、一つの処に集約されてしまつて、

- ① 「人の皇帝や王様」
- ② 「一つの集団としての市民、国民全体」
- ③ 「握りの特別な政党の人たち」

などの人々が「權威」と「權力」を同時に持つてしまうと、「うしはく統治」となり、

常に完全無欠な徳や常に正しい判断能力、実行力や政治を受ける人々の完璧な信頼が無い限り、人権を無視される様な圧政が行なわれる危険性を常に持つことになるのです。しかし、人間は必ずしも徳と智慧を完璧に持ちあわせているわけではありません。

右記の

①は、「古代中世に世界中に見られる 王制の国」です。「暗黒の中世」などと言われるほど、あまり良い歴史を経ている感じがしません。

②は、「フランス革命」や「アメリカ独立戦争」を経た後の「国民だけによる統治」であり、これらは建国前から暫く安定するまでの時には、大変理不尽な犠牲の上に成り立ってきたという歴史があります。

③は、たとえばお隣の「中華人民共和国」のような、「共産党政権」による政治です。「一党独裁政治だからなのか、解決すべき問題は沢山ある」と思われます。

日本の国の政治の形は、①②③のどれでもなく、古代から「權威(天皇)」と「權力(為政者)」が分かれている、非常に安定した仕組みなのです。

日本は、君は「權威(天皇)」であり、民は「權力(為政者)」を含めた国民全員です。私達民(たみ)は、君(天皇)から見れば、皆、一人一人が、為政者を含めて、差別なく陛下から「幸せでありますように」と祝福された「大御宝(おおみだから)」なのです。

例えば、古来の「勅撰和歌集」を見ても、いい歌ならば、身分・出自に関係なく、上は天皇の歌から、諸大臣、民衆、下は、家の無い人（つまり乞食の人、今風に言えばホームレスまで、分け隔て無く載っています。載せたのは「勅撰」ですから「天皇陛下」です。このような国は、恐らく他に見られないのではないか、と思うほどです。これが、「君民一体」「君民共治」の「**じらす統治**」なのです。

したがって、日本ではいまだかつて「奴隷」という概念がありません。皆、自分の責任で、納得のいく人生を送れるはずなのです。へんな状態があったとしたら、それは国民の一部である「権力(為政者)」の責任であり、政治のしくみや権力を持つ人だけ変えればよい、ということになって、変わらないのは「天皇」と「国民」、かくして建国当初から二千年以上も「国」は変わることなく継承している、という、とても良い国です。

為政者が「権威」と「権力」を併せ持つと、時にとんでもないことがおこる可能性を持つてしまいます。政治がおかしくなったら、所謂、「革命」をおこして、国ごとひっくりかえして更新しなければなりません。その時は、桁外れの犠牲と、恐ろしいほどの悪徳という副作用が噴出してしまうでしょう。これを「**うしはく統治**」というのです。

「**じらす統治**」と「**うしはく統治**」の区別という智慧が、「古事記」の神話の中で、伝承としてあるのですから、何と進んだ考え方を持った国でしょう。二千年以上も一つの国として続いているのが何よりの証拠です。

驚くべき事であると同時に、私達は、その勝れた所をよくよく考え心得て、大事にすべきお国柄なのだと思います。

これが、日本の古から変わらない仕組み、国柄です。

今回は、日本古代の文化の一つ、いわゆる「古墳」について、驚きの伝承(?)を書こうと思います。さきほど、日本には「奴隷」という考え方が無かった、と言いました。本当かなあ」と思った方もいらっしやたかもしれません。その証左となるもので、「古墳」は、実は最初からお墓として作られたのではなかった、というお話です。



(心、雨に洗う)

ご本尊修復が漸く終了しました。六月七日に当山本堂に安置されました。

おかげさまをもちまして、本年六月七日に、当山ご本尊、阿弥陀如来座像、修復が終わり、再び本堂に安置されました。今回初めて、平安末期から鎌倉中期の間に造られた古像であったことが分かり、今までの尊容の感を維持したままに、新造当時の面影が伺え、且つ台座の強度を復してこれから数百年間、大きな修復がないような修復が出来ました。これ偏に皆様方の陰陽にわたるお力添え、ご協力の賜でございます。篤く感謝申し上げます。

詳細を文章に纏めている最中です。勸募については、ご負担小さく、皆様のお心に最大限の利益があることを優先にかんがえております。

又、今年秋の気候の宜しいときに、ささやかながら記念の法会、集い等も考えておりますので、総代様方をはじめ、ご協力の程を宜しくお願い致します。

詳細なご連絡、ご相談については、お盆後になりますので、重ねて宜しくお願い申し上げます。

平成二十九年七月九日

終南山 善導寺 七十八世

念譽侯雄 拝